

# おしゃべり美術部レター

## 札幌市立啓明中学校職場体験！

鑑賞ワークショップ「札幌おしゃべり美術部」の第二回が令和六年十一月十五日(金)本郷新記念札幌彫刻美術館で開催されました。美術作品の鑑賞をみんなでおしゃべりしながら楽しむ会で、最後は作品の解説文(批評)を書くことに挑戦するものです。

今回は札幌市立啓明中学校2年生の生徒7名が、職場体験として美術館に訪問しました。「作品について解説する」というのは美術館の仕事のほんの一部に過ぎませんが、とても専門的に重要な仕事ですので、この機会を利用しておしゃべり美術部を敢行することになったわけですね。おしゃべり美術部のコンセプトや方法論につきましてはレター第一号に全て書いてありますので割愛します。確認したい方は左のQRコードからダウンロードしてください。



おしゃべり美術部  
レター Vol.1  
(1.20MB)



③最後に200～400字程度の作品解説文を書いてもらいました。まるで小論文の試験を受けているかのような真剣な雰囲気、50分間執筆しました。



②次に自由鑑賞。自分のお気に入りの作品を見つけてもらい、鑑賞ノートを付けます。その後、一人ずつ作品の特徴と見どころを口頭で発表してもらいました。



①まずは作品を色々な角度からじっくりと観察して、お互いの意見を交換し合います。「作品をここまで細かく見ることは学校の美術の授業ではやったことがないので新鮮でした」という声が多数上がりました。

## 参加者による批評

### ● 打つ

一見するとただの手、それも少し変わったポーズをしているこの作品は、基石を打つ手を表現している。囲碁の対戦の中で、まさに勝負を決める一手をさす瞬間なのだろう。緊張した小指、不自然な手の形から「絶対に決めてみせる。」という強い意志を感じる。

この不自然なポーズは、真似をしてみると難しい形をしていることがよく分かる。特に小指の位置が高く、関節の曲がり具合が普通ではない。私はこの動きに見覚えがあったので思い返してみると、それはピアノの演奏で緊張したときだった。たくさんさんの時間と労力を費やしてここまでやってきたからこその感情の表れがこの形だとすると、この手一つから様々なその人物に関するエピソードが浮かび上がってくる。この作品は「手」単体で人に様々なメッセージを与えてくれる素晴らしい作品だ。(Iさん)

(参加者の批評・裏面に続く！)



本郷新《打つ》石膏、1976年



### 開催中の展覧会

「コレクション展 2024-2025」<記念館>  
2024.6.1-2025.5.25

彫刻家・本郷新(1905-1980)がアトリエとして使用していた建物に、66点の彫刻を展示中。500件以上の本郷新の自著文献から厳選した文章とともに作品を鑑賞することができます。

### 顧問



梅村尚幸  
(本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員)

今回は中学生の職場体験ということで、「社会に出たら答えのない世界を泳がねばならぬ…」ということを伝えました。芸術作品を鑑賞し、それについて言語化することは、こういう世界を生き抜くためのとてもいいトレーニングになるでしょう。

Vol. 2  
2024年11月15日  
本郷新記念札幌彫刻美術館

「本郷新の言葉」  
「子供にとって、その生活環境から縁の遠い題材を書くことから美術の「愛する心」が生れない。感激や喜びや、共感やそのようなものと結びつかないものは美術の心へ入ることが出来ないからである。…そしてこれ等の勉強が、子供の住んでいる土地、学校、家、生活の環境、日々の関心、学校での日課、勉強、遊び時間、それらと互いに関係させて美術をそこへ置くことが先ず第一に指導する人の眼目でなければならぬ」——本郷新「美術について」『教育美術』、一九四六年

